

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

第二言語習得に伴うキャラクターの獲得過程とその背景  
—3人のライフストーリーのSCATによる分析—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 大谷 尚

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 渡邊雅子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 柴田好章

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

本論の目的は、第二言語習得に伴うキャラクターの獲得過程とその心理・社会・文化的背景を探索し、解明することである。

本論文は当初、4人の研究参加者のライフストーリーを分析したものであったが、そのうち1人の背景が他の3人とは異なっており、かつこの1人を除外してもこの論文の論証には十分であるとの指導によって、3名の研究参加者による論文に修正した。そのため、副題が、当初の「-4人のライフストーリーの SCAT による分析-」から「-3人のライフストーリーの SCAT による分析-」に変更された。

以下に各章の概要を示す。

序章では、質的研究における再帰性(reflexivity)を重視する観点から、研究者自身のライフストーリーを記述している。

第1章では、研究の背景と目的を述べている。本論文は、人が常に、状況に応じて意図的または無意図的に表現している様々な人物像を「キャラクター」と捉え、第二言語学習者がその目標言語でどのようなキャラクターを、どのようにして、どのような背景で獲得するのかを、探索的に解明することを目的としている。ここでキャラクターとは、今日一般的に「キャラ」と呼ばれるもので、定延(2011)によって言語学的な概念として「キャラクター」と定義され、その特徴が詳細に示されて以来、言語学の分野では、キャラクターが表現される言葉や身振りなどについて研究が発展しているものである。

近年の第二言語習得研究においては、社会的構成主義の影響を受け、「アイデンティティ」概念をキーワードに、個々の学習者とそれを取り巻く社会に目が向けられ、様々な質的方法を用いた研究が進んでいる。これに対して本研究は、第二言語学習者が示す「自己」を、あえて「アイデンティティ」ではなく「キャラクター」を概念的枠組みとして捉えようとするものである。それは、第二言語で表されるキャラクターには、第二言語学習の動機づけと学習リソースと学習方略というその学習者の第二言語習得のすべてが「表象され」ていると考えられ、その「表象」を獲得するに至った心理を探索的に解明することで、かえってこれまでの「アイデンティティ」を手がかりとした第二言語習得研究ではみることのできなかつた、学習者の心の奥深くに存在するような、学習とその動機の実態が明らかになる可能性があると考えられたためである。

なお、本研究のリサーチクエスションは、第二言語学習者が目標言語で示す母語と異なる(または母語と同様の)キャラクターが

- (1) どのような過程を経て獲得されたのか。
- (2) その獲得の背景にはどのような要因があるのか。
- (3) かれら自身や周囲によってどのように認識されているのか。

である。くわえて、第一言語ではなることができなかつた自分になる手段として第二言語を習得し、キャラクターを変えることがあると考えられるため、その可能性と実態を探ることも本研究のリサーチクエスションとされた。

つづいて、本研究の中心となる概念的枠組みである「キャラクター」について、「アイデンティティ」や「役割」をはじめとする他の概念との差異を示し、それを定延(2011)に依拠して、「現代日本の若者に限らず、意図の強さの度合いや他者との関

## 論文審査の結果の要旨

無にかかわらず、社会的には変わらないことが期待されているが、実際は状況によって変わる、人間が自分や他者を「自分／あの人とは〇〇な人」だと直感的に認識する人物像」と定義づけている。最後に、キャラクターに関する先行研究を、(1) 言語学以外の分野におけるもの、(2) 日本語教育におけるもの、(3) 同一の言語内における一人の人間の多様性に関するもの、(4) 異なる言語間における一人の人間の多様性に関するもの、の4つに分類して概観している。

第2章では、本研究の研究方法について述べている。とくに、本研究の依拠する解釈学的なパラダイムについて述べたあと、本研究で質的データ分析手法 SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いる理由と意義を説明している。また、近年の社会学や日本語教育におけるライフストーリー研究の動向を踏まえ、本研究が用いる「ライフストーリー研究」の位置づけを行っている。

第3章では、日本の2名の声優という「キャラクターモデル」に強い影響を受けて発話キャラクターを獲得した日系アメリカ人日本語学習者マイケル(仮名、以下すべて同じ。)のライフストーリーを分析している。マイケルにとってこのキャラクターモデルは、単に日本語学習のモデルであるだけでなく、憧れの対象、学習の動機付け、学習のエネルギー源となり、彼の人格形成にも影響を与えている可能性が示唆された。また、マイケルの発話キャラクター獲得の背景には、高齢日本語話者との接触による日本語高汎用性への希求と礼節重視の志向、明朗な自己像の演出の必要性などの要因があった。

第4章では、アニメの視聴によって日本語を習得した、フランス人日本語学習者クロエのライフストーリーを分析している。分析と考察の結果、彼女の発話キャラクター獲得の背景として、フランス(西洋)と日本(東洋)という対照の中に、日本的な相互協動的自己観へとつながる様々な事柄が内包される構造が見いだされた。そして彼女の日本語習得の過程は、アニメの長時間視聴と日本語一人芝居という個人的言語実践を通して、この対照のフランス側ではなく、日本側(アニメで見た日本)において自己肯定を目指し、キャラクターを継続的に探索し、獲得する過程であったことが示唆された。また、日本語でのキャラクターの獲得には、重要な他者として、ある中年の日本語教師が大きな役割を果たしていた。

第5章では、日本→米国→カナダ→日本という4つの場(site)に渡って「移動する子ども」であった日本人英語学習者ヒロのライフストーリーを分析している。彼は、その言語能力とキャラクターに不安を抱きつつ、異文化環境で無意識的にキャラクターを獲得し、帰国後には自国の文化で意識的にキャラクターを修正し、その不安に折り合いをつけようとしていた。そのきっかけは英日両語ともに、異文化における不適切なキャラクターの表出による失敗経験であり、それがその文化でのキャラクター獲得の契機となっていた。なお学習の背景には、父親からの承認欲求が存在した。また、二つの文化におけるキャラクターの獲得には、「重要な他者」として、それぞれ一人の友人が大きな役割を果たしていた。

## 論文審査の結果の要旨

第6章では、まず6.1でリサーチクエスチョンを振り返り、3人のライフストーリーの比較検討から第二言語学習者にとってのキャラクタ獲得について検討している。そこでは、(1) 共通点としての、多量インプットと多量アウトプット、またキャラクタ獲得を支援するだけでなく、ありのままのかれらを受容し肯定する「重要な他者」、(2) キャラクタ獲得の背景としての計り知れないほどの多様性とそこにしばしば見られる否定的な体験、(3) 獲得されたキャラクタに対する本人の認識の多様性、が見いだされた。また、キャラクタの獲得が「みられたい自分」になるためになされることと、そのような過程は、インタビューーとの間の十分なラポールに基づいた詳細な聴き取りと、その解釈的 (interpretive) な分析によってはじめて解明されるものであること、そしてこれは、従来の実証主義的な動機づけ研究ではアプローチが困難な、学習者の奥深くに存在するものであって、かれらの学習のすべての表象である「キャラクタ」を通じた検討によって初めて導き出され得るものであることが述べられた。

続く6.2では、本研究の分析の結果から、言語教育への示唆を得ることを試みている。それは、(1) 第二言語学習者が「みられたい自分」になるという目標言語でのキャラクタの意義を、指導者が理解するべきこと、(2) 第二言語学習者は目標言語での自分のキャラクタを無意識に表現せず、認識した方が良いと言えること、(3) しかしながらキャラクタは、その学習者の人生そのものを表象するため、教師からみて不適切で明らかに不利益になると見られるキャラクタの獲得を望む学習者に対しても、規範によってそれを矯正することには慎重になるべきこと、(4) とはいえ、学習者が望むキャラクタの獲得を無検討に支援することは、専門職として不適切であり、むしろ学習者とともに、人生にとっての最善の第二言語習得のあり方を検討するべきこと、(5) グローバル化にあっては、ネイティブスピーカーをモデルにしたキャラクタを作らなくて良いような、多様なキャラクタを受け入れる社会を作るべきであり、それは教育研究者の努力にかかっていること、である。

最後に第7章では、本研究についての反省を述べている。

本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべきは次の諸点である。

- (1) 第二言語習得で従来おもに自己を扱うモチベーション研究では、伝統的な動機付け研究における内発的・外発的動機付け等の視点に限定されていたのに対して、本研究では、キャラクタ獲得という内と外を通じた「表象行為」を学習動機として見ることで、第二言語習得の動機の新たな側面に光を当てたこと。
- (2) いっぽう第二言語習得を文化資本の獲得として見る研究に対しても、自己肯定感や言語学習と個人の家庭的・内面的背景の問題など、文化資本の高低では論じられない側面を扱い得たこと。むしろある人がそもそもなぜ「その」コトバに投資することが必要だったのかの心理的な背景を探究することができたこと。
- (3) しかしながらその研究参加者の、○国人、移民、○語学習者などの客観的な属性ではなく、特異なキャラクタを有するというある意味で感覚的・感性的に感受される属性を研究上の出発点とするため、そのキャラクタの存在をできるだ

## 論文審査の結果の要旨

け客観的に示すためのあらゆる試み(音声学者への意見聴取や音響分析などの科学的な方法をむ)を導入して成功させていること。

- (4) 従来の常識的で固定的な概念的枠組みを当てはめず、あくまで研究参加者のライフストーリーの聴き取りとその深い検討から概念を導出して記述し、意味を解明しようとする解釈的(interpretive)な質的研究の長所を最大限に活かしていること。(例えばキャラクタの使用によって、自己の「欠点を克服する」のだとの安易な説明ではなく「欠点をカバーする」のだという解釈と説明など。)
- (5) 以上のようにして、先端的な言語学的概念的枠組みである発話キャラクタを、第二言語習得研究に適用して、オリジナルで豊かな成果を上げていること。

いっぽう本論文に対して、審査委員からは次のような点が指摘された。

- (1) 本研究では、定延(2011)のキャラクタをどう発展させることができたのか。
- (2) 本研究では、「どのようにキャラクタが獲得されるか」、つまり how を徹底して追究するスタンスを堅持しているが、実際には論文全体に「なぜキャラクタを獲得しようとするのか」、つまり why が著されているように思える。それをなぜ、あえて明記しようとしなかったのか。
- (3) この研究は発話キャラクタ獲得の背景に対する深い検討によって、第二言語習得における「通常の教授者と学習者との関係から削除されているところにスポットライトを当てた」こと、そしてそれは、教授者と学習者という近代的な関係性を超え、脱近代に開かれていくような可能性を有することに意義があるとも考えられるが、それについてどのように考えているか。
- (4) そもそも質的研究として、あらためて同じ研究参加者に向き合うとしたら、この研究で得た知見と同じ知見が得られると考えているか、あるいは得られないものと考えべきか？

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな学問的視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を「博士(教育)」の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。